



シーニックデッキ&カフェ スマホスタンプラリー2026開催中!



地元おすすめの景色や食を楽しめる
「シーニックデッキ・シーニックカフェ」を巡ってプレゼントをもらおう!

スタンプ地点は、全道のシーニックデッキやシーニックカフェ、秀逸な道で100カ所以上! デジタルスタンプラリーなので、スマホさえあれば気軽に参加できます。スタンプ10カ所以上でプレゼントに応募可能! 抽選で特産品などが当たります。ドライブにお出かけの際は、ぜひ、シーニックデッキやシーニックカフェ、秀逸な道を巡りながら、スタンプラリーをしてみてください!



北海道のよりみちドライブ情報 「Scenic Byway vol.37 夏秋号」好評配布中!

本号の特集テーマは、「巡る」。海からも山からも爽やかな風を感じて走る北海道の「夏」のドライブ。グッと気温が下がった日の後に、大地が一気に彩られる「秋」のドライブ。本号は、夏の始まりから秋の訪れまでの季節を楽しむ北海道の旅を「巡る」をテーマに、ご紹介します。「Scenic Byway vol.37 夏秋号」は、全道の道の駅等で配布中です。ぜひ手に取ってご覧ください。



「シーニックドライブマップ2026年度版」発売中! 定価250円(税込)

ドライブマップ2026が発売になりました! 今回の特集は、「道でつながら 過去・現在・未来【よりみち歴史ドライブ】」。その他、「魚 vs 肉! 道の駅グルメ」、地元ならではの「シーニックなカフェ」をご紹介します。「道の駅」マップがついたシーニックドライブマップ2026年度版は、全道の道の駅等でお求めください!

「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!



編集後記

みなさん、「定山溪国道」をご存じですか? 札幌市から定山溪方面へ向かう国道230号のうち、定山溪周辺の区間を指す呼称で、山あいの美しい地形に道路を通すため、橋やトンネル、覆道など特徴的な構造物が数多く整備されています。この夏、無意根大橋を含む5つの構造物群が、北海道の国道として初めて国の登録有形文化財に登録されました。これを記念したチ・カ・ホでのパネル展(9/28まで)をお手伝いする中で、構造物の魅力はもちろん、厳しい地形に挑んだ当時の技術者たちの工夫や情熱を知り、そのプロフェッショナルな仕事ぶりにとても感銘を受けました。(R.W)



dec monthly vol.491

2026年8月1日発行 発行人 橋本 幸

〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL (011) 738-3361 FAX (011) 738-1886 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_info01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2026.8.1 vol.491 デックマンスリー



● **Monthly Topic** (マンズリートピック)
寄稿「日本風景街道20周年に向けての提言」について
● **dec Report** (デックリポート)
「第24回シーニックバイウェイ北海道推進協議会」開催報告

dec Interview >>> 北海道商工会議所連合会会頭、シーニックバイウェイ北海道推進協議会会長 **安田 光春 氏**

昨年12月、北洋銀行取締役会長の安田光春さんが北海道商工会議所連合会(道商連)の新会頭に選任され、シーニックバイウェイ北海道推進協議会の新会長となりました。北海道のリーディングバンクのトップとして地域振興に携わってこられた安田さんにご自身の歩みや道商連の取り組み、シーニックバイウェイ北海道への期待をうかがいました。

札幌市のご出身で大学時代は東京で過ごされ、就職でUターン。以来、銀行員の道を歩んでこられました。

生まれは札幌市北区で、祖父母と両親は小樽の出身です。父は小樽の中央市場で青果店を営んでいたのですが、出入りしていたすし店の札幌進出に伴って札幌に移り、青果商の傍ら北24条西4丁目付近にあった市場で惣菜店を開きました。

しかし、私が5歳のときに父は亡くなり、同じ商売の継続は難しくなったため、母は麻生に移って酒タバコなどを売る、今で言うコンビニのような店を始めました。私は姉と二人、そうした母子家庭で育ちました。

札幌北高校から慶応義塾大学商学部に進みましたが、「慶応出身」と言うと、よく「金持ちのボンボン」だと勘違いされる(笑)。しかし、当時の慶応の文系の学部には私みたいなボンボンでない学

生が結構いました。私は母子家庭を支援する福祉団体の奨学金で授業料を賄い、生活費はアルバイトで稼いでなんとか卒業しました。

アルバイトはほぼ4年間、進学塾の講師として働きましたが、当時、人気の塾だったこともあり、時給は北海道では考えられないぐらい高かった。夏期講習でまとまった時間を働くとかなりの高額収入になり、有名塾の講師引き抜き競争で時給がいきなり二倍になるなど自活する身には大いに助かりました。時にはバイト仲間で軽井沢のペンションでテニスさんまいということもありましたね。

卒業近くになって母が体調を崩して入院したこともあり、東京の就職は考えず、札幌に戻ることにしました。札幌ならテレビ局などマスメディア系がいいと思っていたのですが、高倍率でコネもないのでダメと諦めて、就職活動解禁日も過ぎたころに北洋相互銀行(現・北洋銀行)へ。こちらはその場で「内定」をいただくことができました。

1983年入行で2018年に初の北洋銀行生え抜きの代表取締役頭取に。24年に取締役会長に就任されました。金融再編の激動の時代をくぐり抜けてこられたが、特に印象的なお仕事とは。

やはり1997年の北海道拓殖銀行破綻による道内営業譲渡に関する仕事ですね。

食、観光に加え、半導体関連産業の集積などで百年に一度の好機を迎えている北海道。その経済的恩恵を地域限定でなく、全道に波及させていくことがこれからの課題ですね。

dec Interview

やすだ みつはる

1959年札幌市生まれ。1983年慶応義塾大学商学部卒業後、北洋相互銀行(現・北洋銀行)入行。2005年宮の沢支店長、07~09年石屋製菓(株)出向などを経て14年取締役経営企画部長、16年常務取締役、18年代表取締役頭取、24年に取締役会長に。25年北海道商工会議所連合会会頭、シーニックバイウェイ北海道推進協議会会長に就任。趣味は読書と食べ歩き。P.ドラッカー関連書を愛読し、札幌近郊のそば名店めぐりを楽しむ。



私は経営企画部で拓銀と当行の店舗統廃合の作業に携わりました。全道で拓銀から引き継いだ店舗は109店でしたが、道内各地を回って店舗の規模、立地条件などを勘案し、二行のどちらの建物を使うか、人員はどうするかなど具体的に調整、判断していきました。私が担当したのは30店舗ほどでしたが、大変ハードな仕事でした。

最も大変だったのは人の融和に関する問題です。もともと異なる銀行、職場だったのですから多面にわたる配慮を要します。業務用語も異なっていて、例えば「預金担保の手形貸し付け」を意味する略称が二行で違っている。そうした言葉の統一も進めました。

預金システムの統合では預金口座数が多く、先進的な拓銀のシステムに合わせ、融資システムは小さな取引先が多く、調書などの細かいデータが出力できる北洋のシステムに統一しました。何にかかわらず軋轢を生まないように両行のバランスをはかり、合理性、効率性を重視して進めた統合でしたが、まさに一大事業でした。

もう一つ、私にとって大仕事と印象深いのは、2000年ごろに「法務コンプライアンス室」の立ち上げに携わったことです。当時は金融機関における「コンプライアンス（法令順守）」の重要性が提起されて間もないころでマニュアル策定も手探りでした。しかし、発足時の法務コンプライアンス室は室長一人にスタッフは私一人だけ。マニュアルづくりはかなりの力仕事で、今でもマニュアルを見ると苦労した当時は懐かしく思い出されます。

では、道商連のお取り組みについてお聞かせください。道商連は道内42の商工会議所と連携、結束して地域経済の振興と北海道の活性化に尽力されています。

道内事業者の支援という点で、道商連と北洋銀行の使命は共通していると思います。ただ、銀行はある程度以上の規模の事業所の経営改善をサポー

トするのに対して、会議所は地域の小さな事業者支援の手を伸ばし、きめ細かく経営指導することが求められます。その大変さがあると思いますね。

私の最初の任期である第34期（2025年12月～28年11月）の活動方針のスローガンは「Leading the Challenge～地域と共に未来を創る～」です。北海道を取り巻く、厳しく多様な課題に対して「先頭に立って困難に立ち向かい、課題解決を導く」という強い決意を込めています。

3つの柱を掲げており、第一の柱は「持続可能性の向上による地域課題の克服」です。人口減少や慢性的な人手不足、広域分散型の地域構造という課題に対し、DX推進による生産性向上や移住促進などをはかる一方、道路、鉄道、新幹線、空港、港湾など広域インフラ整備推進に向けて政策提言などに精力的に取り組めます。

第二の柱は「成長戦略実現による稼ぐ力の向上」。北海道にはGX、次世代半導体、航空宇宙など新たな成長産業が集積しつつあり、その経済効果を偏りなく全道に波及するように活動していきたい。従前の強みである「食」「観光」についても一層の高付加価値化や販路拡大を推進したいですね。

第三の柱は「商工会議所の連携推進と経営支援体制の強化」で、道内42商工会議所の地域の声を政策提言につなぎ、中小企業支援の充実に注力します。そのためには商工会議所の職員育成や経営支援体制の拡充も必要です。

このような方針を踏まえ、今年度は激しい経営環境の変化に地域の中小企業・小規模事業者が取り残されることのないよう主導し、新成長分野への挑戦と生産性向上を後押しする1年に

したいと考えています。

長年、道商連では食・観光関連産業の振興に取り組まれてきました。今年6月、北海道では20年ぶりに「全国商工会議所観光振興大会」が行われましたね。

この大会は全国の商工会議所関係者や観光事業者が観光を軸とした地域振興策について学び合う全国大会で、2004年から毎年、全国9ブロックの持ち回りで開催されています。今回は「有機観光新産業～全ての事業活動×観光＝新産業創造～」をテーマに6月2・3日の2日間、旭川、釧路、札幌、登別の4都市で異なる分科会テーマにより同時開催しました。このような複数都市の分散開催は大会初の試みで、各都市の商工会議所の尽力で実現し、おかげさまで全国214商工会議所・連合会から約1300名の参加がありました。



全国商工会議所観光振興大会2026 in 北海道（釧路会場）

観光の人材育成に関する取り組みでは、今年で第21回を迎える「北海道観光マスター検定」があります。毎年11月23日に道内各地の商工会議所を会場に北海道に関する幅広い知識を問う筆記試験を実施するもので、例年600～700名程度の受験者がありますが、観光業界を目指す大学・専門学校生の受験者も多いようです。

一方、食産業関連では「スーパーマーケット・トレードショー（SMTS）」[主催：（一社）全国スーパーマーケット協会、会場：千葉・幕張メッセ]という全国レベル

の大規模商談会への「北海道コーナー」出展があります。これは「北海道ブランド販路開拓・拡大実行委員会」（北海道、札幌市、道内金融機関、経済団体などで構成）が実施し、道商連が事務局を担当しているもので、今年2月の第60回SMTSでは道内から食品関連の139社・団体が出展し、海外を含むバイヤーと交流、商談を行いました。北海道コーナーは地域別コーナーで最も広いスペースで展開していますが、混雑密度は他地域をしのぐ人気だと聞いています。

一般消費者向けの事業が東京・池袋で毎年10月、5日間にわたって開催している「北海道まるごとフェアinサンシャインシティ」です。9年前から㈱サンシャインシティと道商連の共催で実施している北海道物産展で例年約60店が道内から出店しています。シーニックバイウェイ北海道も毎年、ブースを展開し、「秀逸な道」など北海道のドライブ旅行の魅力を発信しています。

では、シーニックバイウェイ北海道についてお聞かせください。シーニックバイウェイ北海道の活動には各地の商工会議所の方々がたくさん携わってられます。

実は、シーニックバイウェイ北海道推進協議会の会長就任までシーニックバイウェイ北海道の全体像はよく知らなかったというのが正直なところです。「北海道観光マスター検定」の公式テキスト「北海道観光ハンドブック」を見ていたら、全道17に及ぶルートのマップが掲載されていて、こんな素晴らしいことをしているのかと驚きました。これはもっと広くPRしたいし、道商連としても連携を深めたいと思っています。

今年3月、会長就任後初めて「シーニックバイウェイ北海道推進協議会」に出席しましたが、そこで特に印象的だったのは各地の活動から優れた取り組みを顕彰する「ベスト・シーニックバイウェイズ・プロジェクト」の表彰式でした。これなどはもっ

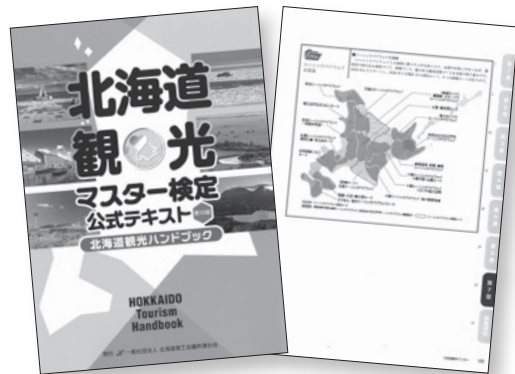


「北海道まるごとフェアinサンシャインシティ2025」のシーニックバイウェイ北海道のブース

と新聞などマスコミに注目されていることで情報発信に注力したい。それが取り組んでいる人たちの大きな励みになると思います。

最後に、北海道の今後について最近お感じのことをお聞かせください。

北海道の魅力は冷涼な気候や豊富な観光地、おいしい食べ物と従前から言われてきましたが、最近はそれに加えて千歳市にラピダスの半導体製造拠点が建設され、関連分野の企業進出が60社近くに及ぶという目覚ましい動きがあります。これは北海道にとって今後の百年にあるかないかぐらいの画期的なことであり、観光についてもニセコを筆頭に世界的知名度を持つ地域が増えて期待は膨らみます。



「北海道観光ハンドブック」のシーニックバイウェイ北海道の紹介ページ

ただ、ここで強く思うのは、そのような発展を地域独自の動きと見切るのではなく、その経済的恩恵を全道に広く波及させていかなければならないということです。道商連としては全道の会議所が連携して活性化効果が広

がるように取り組みたいと思っていますが、最も効果的なのは観光であり、各地で多様なコンテンツをつくって全道への送客を図りたいところです。

それから冬季オリンピック・パラリンピックの札幌・北海道開催は観光振興のみならず世界に北海道の文化を発信する大きなチャンスです。また、1972年の札幌五輪で札幌のまちづくりは飛躍的に進みましたが、その五輪直前に竣工した札幌市役所本庁舎も老朽化が目立つようになっている。やはり、新しいまちづくりの観点からもオリパラはぜひやりたい。札幌に限定せず北海道全体で取り組むことができればと考えています。

統合型リゾート（IR）の誘致も北海道経済に寄与するものとして経済界として機運醸成を図りたいですね。

IRにはコンベンション施設などを含む大規模複合施設の収益を支えるために富裕層向け娯楽施設としてカジノが設けられていますが、日本では「カジノ=賭博」という負のイメージが強すぎる。そうしたイメージ払しょくのアピールも必要でしょう。

冬季オリパラ、IRについては今後の北海道経済のために、経済界が一枚岩になって関係機関や行政に働きかけをしていきたいと思っています。北海道がますます世界から注目され、訪れる人が増えれば、道内各地の景観や文化に誘うシーニックバイウェイ北海道のルートもより広く親しまれるのではないのでしょうか。

■はじめに

日本風景街道は、ルート登録を開始してから令和9年度で20周年を迎えます。この取り組みは、道を舞台に「多様な主体による協働のもと、景観・自然・歴史・文化等の地域資源を生かし、国民的な原風景を創出するとともに、『国土文化の再興』に寄与すること」を目指して始まりました。現在は、全国149ルートが日本風景街道として登録されています。(令和8年3月時点)

NPO法人日本風景街道コミュニティは、これまでの活動を振り返り、その意義と課題を整理し、今後の持続可能な発展に向けて方向性をまとめた提言書を作成し、令和8年3月18日に国土交通省道路局へ正式に手交しました。ここにその提言の概要を紹介します。

1. 日本風景街道20年間の活動成果

過去20年間、各ルートにおいて、住民やNPO、企業、自治体、道路管理者など多様な主体が協働し、生活道路から幹線道路まで幅広くその多面的な価値を育んできました。単なる道路の維持管理にとどまらず、景観保全、環境保護、観光振興や地域産業活性化にまで幅広く貢献しています。

特に特徴的なのは、①自治体境界に捉われず、②特定政策分野に捉われず、③官民分担論にも捉われないという「三つの捉われない」姿勢を心がけている点です。これにより行政区分や既存の政策枠組みを超えた自



日本風景街道登録ルート：支笏洞爺ニセコルート
(シーニックバイウェイ北海道 指定ルート)
シーニックバイウェイ「秀逸な道」(国道453号)

由かつ斬新な協働が可能となり、地域固有の多彩な文化や風土を反映した風景づくりを促進してきました。この柔軟性は我が国の国土行政においても先進的で類例を見ないものと言えます。全国各地でこうした努力が地域固有の魅力を再発見するとともに、「かけがえのない場所」としての地域アイデンティティを高めています。こうした共創により多様な関係者が道を介して交流・連携する中で、ある種の“共同行為の愉快さ”を体現しながら、個人主義を乗り越え、地域独自の風景を守り育ていく国土文化の再興の道筋を力強く指し示しています。

2. 国土・地域の実情と近年の政策的動向

一方、この20年で地域や国土を取り巻く状況は大きく変化しました。人口減少や超高齢化、経済基盤の変容、生活環境の劣化、大規模災害の頻発など、地域が抱える課題は深刻化の一途です。

他方、働き方改革や多様なライフスタイルへの転換により、自然との調和を求める声が高まり、豊かな地方生活への関心も強まっています。加えて訪日外国人観光の回復・拡大は、地方各地への注目や訪問の増加をもたらし、地域活性化の追い風となっています。

こうした状況の下、現在、国の主要施策においても「地域や国土の存続」が重点的なテーマとなっており、人口戦略や地方創生交付金の増額措置などに加えて、地域生活圏や生産空間の形成、公共空間のり・デザイン、交通空白の解消、最新モビリティ技術の

NPO法人日本風景街道コミュニティ

寄稿「日本風景街道20周年に向けての提言」について

導入、グリーンインフラの拡充、農山漁村経済基盤の創生など、地域や国土の維持・存続と密接に関連した政策メニューが次々と打ち出されています。

3. 日本風景街道の意義と課題

このような環境下で、日本風景街道が心がけてきた「捉われない」協働の姿勢は、多様な主体が連携して地域全体を見据える総合的アプローチとして、現代の国土政策における先駆的な取り組みでした。

しかしながら、創設以来の法的・制度的な位置づけが不完全なままで支援体制も脆弱であり、地域活動の継続や発展を牽引する仕組みは依然として十分とは言えません。日本風景街道の創設から20年が経過する中、国土交通省の本取り組みへの関与は総じて弱くなりつつあり、地方整備局や道路管理者の中には各ルートの活動に当事者として積極的に関わっていないケースも見受けられます。

さらにデジタル化の遅れや、活動の財政的収益性の確保、カーボンニュートラル推進など、時代に即した対応が不十分であり、これらは今後の国土文化再興と地域活性化に向けての重要な課題です。

4. 今後に向けた具体的提言

以上を踏まえ、以下の四つの柱を提案しました。

国の重点政策への日本風景街道の積極的関与を進める仕組みづくり

防災・減災や国土強靱化、カーボンニュートラル推進、地域共生の道路管理支援などの重要課題に、日

本風景街道の枠組みを明確に位置づけ、制度と財政的基盤を整備する。特に、インバウンド観光や多地域居住促進に関する国策と整合させて貢献を強化する。



令和6年 能登半島地震

日本風景街道の地域的活動とその広域連携を強化・推進する仕組みづくり

日本風景街道を地域の文化交流の基盤とすると同時に、災害時には復興支援の「ソフト面での社会インフラ」として機能させるため、自治体や道路管理者との連携による包括的支援・伴走する体制を構築し、次世代への継承を明確化する。成果や情報の全国共有と事例の横展開を図る。

中間支援組織の強化及び地方整備局等の伴走的支援促進

行政と地域の架け橋となる中間支援組織の養成と支援、地方整備局や国道事務所の継続的な伴走支援体制の制度化を推進。関係者を包括的に結束する連携体制の構築も重要。道の駅との連携強化も課題として取り組む。

NPO法人日本風景街道コミュニティの役割や活動の明確化と重点化

果たすべき中間支援機能を「全国展開」と「各地域で目指すこと」に分類し、前者については、国の政策と各地の状況・課題・取り組みの橋渡しとして、日本風景街道大学や国への政策提言や対話などを行う。後者については、各地域における活動実態を踏まえ、「重要な道路政策との連携」



日本風景街道大学「宮崎本校」

や「全国的なルート間の連携」、「企業、道の駅、観光等の多様な主体との連携」等、モデルケースとなるような事例づくりを図る。

■おわりに

本提言を受け、「日本風景街道 未来ビジョン共創会議」が設置されました。当会議は、多様な関係者の協働促進と将来への具体的な制度設計につながる場として更なる期待が寄せられています。

今後、国土交通省の継続的な支援・伴走のもと、地域の魅力と国土の美しさを未来へつなぐ日本風景街道の活動が一層充実・発展することを強く願っています。



提言書の手交「国交省道路局長」

第24回 シーニックバイウェイ北海道 推進協議会 開催報告

シーニックバイウェイ北海道推進協議会 事務局

2026年3月25日、グランドメルキュール札幌大通公園において「第24回シーニックバイウェイ北海道推進協議会」(以下、推進協議会)が開催されました。会議には、経済・観光団体、国・北海道等の構成機関・団体の他、包括連携協定企業、各ルートの活動を支える関係者ら約120人が出席。制度開始から20周年を迎えたシーニックバイウェイ北海道の歩みを確かめるとともに、地域活動の現在地と次の展開を共有しました。

シーニックバイウェイ北海道 推進協議会の取組報告

シーニックバイウェイ北海道は、みちをきっかけに地域住民等と、行政、企業が連携し、「美しい景観づくり」「活力ある地域づくり」「魅力ある観光空間づくり」を進める取組です。全道には指定15ルート、候補2ルートがあり、約500団体が、それぞれの風景や歴史、文化、食、自然を生かした活動を続けています。推進協議会は、こうした活動の企画・推進に加え、候補ルートの指定や制度運営に関する意思決定を担っています。

会議では、まず推進協議会を構成する各団体・機関から取組状況が報告されました。観光振興や広域周遊、国立公園の魅力発信、森林・道路環境の保全、道内外への情報発信など、立場の異なる組織が同じ方向を向いて活動していることが改めて示されました。道路という日常の空間を、移動のためだけではなく、地域の物語と



会場の様子。経済・観光団体、行政機関、企業、地域活動関係者らが一堂に会した

出会い、人と人を結ぶ舞台として捉えることが、この取組の特徴です。各地の小さな実践がルート内でつながり、さらに全道のネットワークへ広がることで、単独の団体だけでは生み出せない効果につながっています。



写真左から：シーニックバイウェイ北海道推進協議会 安田光春会長、遠藤達哉副会長

包括連携協定企業・ 協力団体及び機関の取組報告

北海道コカ・コーラボトリング、北海道地区「道の駅」連絡会、クリプトン・フューチャー・メディア、北海道エネルギー、パナソニック コネクトなどが連携事例を紹介。清掃活動への参加や飲料提供、デジタル媒体による発信、道の駅を拠点とした周遊促進など、企業が持つ資源や技術を地域活動に生かす実践が共有されました。包括連携協定制度は2012年に始

まり、現在は15の企業・団体と協定を締結しています。地域側の発想と企業側の強みを結び付け、継続できる仕組みに育てていくことの重要性が感じられる報告となりました。

シーニックバイウェイ北海道 20周年記念フォーラム開催報告

20周年記念フォーラムの報告では、2025年6月に「20年の歩みを辿り、明日の北海道を共に創る」をテーマに開催され、道内外から約250人が参加したことを紹介。地域に蓄積された人のつながりや協働の仕組みを「ソフトのインフラストラクチャー」と捉え、その成果を次世代へどう受け継ぐかが議論されました。また、コロラド・シーニック&ヒストリックバイウェイズとの基本合意書締結を契機に、定期的なウェブミーティングや相互の情報発信が始まったほか、20周年記念誌の制作も進められていることが報告されました。

ルート視察実施報告

令和7年度のルート視察は、「釧路湿



推進協議会の構成団体・関係機関から、多分野にわたる取組が報告された。写真左から：北海道経済連合会 藤井裕 会長、(公社)北海道観光機構 事業企画本部 生川幸伸 副本部長、(一社)日本自動車連盟 北海道本部 事業部 村上直樹 部長、北海道経済部観光局 金盛修 誘客担当局長、北海道森林管理局 計画保安部 伊藤俊之 調査官、北海道経済産業局 浦田秀行 局長、北海道地方環境事務所 国立公園課 相原百合 課長補佐、北海道運輸局 清野信也 観光部次長、笹野康幸 国際観光課長、東日本高速道路(株)北海道支社 宮入徹往 支社長、総合企画課 児玉絵理 課長代理

原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ」と「宗谷シーニックバイウェイ」を対象に実施されました。釧路・阿寒・摩周シーニックバイウェイでは、景観改善や道の駅での取組、地域やルートコーディネーターによる丁寧な案内が評価される一方、観光人材の不足と、地域全体で活動を担う体制づくりが課題として挙げられました。宗谷シーニックバイウェイでは、抜海、サロベツ湿原、豊富温泉、宗谷岬などを視察し、「白い道」でのサイクリングも体験。「あたたかい最北の道」の演出、道を生かした体験観光、SNSや動画による発信、きた北海道DMOへの期待などに関する議論内容が報告されました。

シーニックバイウェイ 「秀逸な道」の取組報告

「秀逸な道」については、選定区間全15区間で清掃や植栽、景観の維持・形成、情報発信などが進められ、起終

点への看板設置も順次進められていることが報告されました。道内調査での「秀逸な道」の認知度は約63%に高まり、認知のきっかけとして道路上の看板が最も効果的でした。首都圏での認知度は18%にとどまる一方、「秀逸な道」への訪問意向は約81%と高く、今後の情報発信によって大きく伸びる可能性が確認されました。

ベスト・シーニックバイウェイズ・ プロジェクト2024の審議

最後に「ベスト・シーニックバイウェイズ・プロジェクト2024」を審議し、各賞を決定しました。最優秀賞と活力ある地域づくり部門賞には、宗谷シーニックバイウェイの「シーニックバイウェイの広域連携をベースとした地域連携DMOの設立」が選ばれました。また、知床ねむろ北太平洋シーニックバイウェイの「ひがし北海道の新しい旅のカたちづくり事業」は、活動団体

賞と魅力ある観光空間づくり部門賞を受賞しました。このほか、美しい景観づくり部門賞には、支笏洞爺ニセコルートの「学官地域連携によるビューポイント魅力アッププロジェクト」、魅力ある観光空間づくり部門賞には、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイの「ひがし北海道『より道』トクするQR」が選ばれました。協議会後のセレモニーでは、受賞団体の活動をたたえ、成果を広く共有しました。

20年間で育まれたのは、美しい道の風景だけではなく、地域を越えて知恵を持ち寄り、行政や企業と力を合わせ、課題に応じて活動を更新していく関係そのものが、北海道の大切な基盤となっています。今回の協議会は、その蓄積を次の世代へつなぎ、「共に北海道の未来を創る」ため、道を入口に北海道の価値をさらに磨いていく決意を共有する場となりました。



協議会後のセレモニーで、受賞団体と関係者が記念撮影



ベスト・シーニックバイウェイズ・プロジェクト2024についてアドバイザー委員より講評いただいた。写真左から：GB産業化設計 代表取締役 岩井宏文 委員、東京科学大学 教授 真田純子 委員、IWANAI UNITED(株)代表取締役 日黒沙弥 委員

※シーニックバイウェイ北海道の取組について、専門的な知識や経験をもとにアドバイスを行う有識者